

【用語】群馬郡村上村―北群馬郡小野上村 高札―お手紙、他人を敬つてその書簡をさす 大悦―非常に喜ぶこと、大きな喜び 不斜―一通りでない 小子―小生、自己をへりくだつていう語 懸念―心配 御玉―金銭のこと 朱料―門人の歌などに朱点をつけ、受ける礼金 日本記―日本書紀 国書―日本で著述された書物、漢籍や仏典に對していう 万葉―万葉集 諸色―色々の品、物価 月並題―月例の歌会での題目 出詠―歌を詠み送ること 机下―敬つて相手の名前に添えて書く語

【解説】差出人の彦八こと橋本直香（文化四〇明治二十二年）は山田郡境野村（桐生市）に生まれ、橘守部に師事した国学者・歌人である。機業地の桐生とその周辺では、買次商人や織物業者として活躍する商人がその経済的余裕を背景に国学を信奉する場合が多かつた。橋本家は祖父の代からの飛脚業で、直香の代からは機業も営んでいた。天保十三年（一八四二）直香は家業を妹に譲つて江戸へ出て、黒川春村のもとで学び、次いで守部に入門して国学・和歌を学んだ。彼は守部の後継者として万葉集を研究し、『万葉集私抄』二〇巻や万葉集に収められている上野国関係の歌四九首を研究した『上野歌解』など多くの業績を残した。

この文書は年次不詳ながら直香が村上伊右衛門にあてた書状である。伊右衛門からの送金・朱料への礼、依頼された書籍を購入して残金とともに送ったことなどを述べたのち、出詠の依頼やきこの狩りにも触れており、二人の間柄がうかがわれる。一方、村上家は代々伊右衛門を称し、嘉永三年（一八五〇）没の円次と長男の耕作（文政七年生）は寺子屋を開き漢学等を教えていた。とくに耕作は文久年間より江戸に遊学し、守部と直香に師事して長歌に秀でたと伝えられている。したがって、この書状は耕作にあてた可能性が考えられる。